

巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 鵜飼 正樹

「自分がおもしろいから学問をやっているんだ」

「学問は最高の道楽だ」

学術顧問として本学の設立に尽力された梅棹忠夫先生は、つねづねこうおっしゃっていたといえます。

かりにタテマエ上のことであっても、「自分の研究はこんなことで世の中の役に立つんです」ということを示すことが、説明責任のようになっている今の時代、このような言葉を堂々と口に出せる大学関係者が、はたしてどれほどいるのでしょうか。

学生たちが大学に求めるのも、知的な探求より、就職につながる資格です。受験生は有利な資格の取れる学部や学科に流れ、教職員も「取れる資格は取っておけ」といった指導をする。ほんとのところはたいして役に立たない資格も少なくないことぐらい、ちょっと調べればすぐわかるのに……。

自慢ではありませんが、私の研究はまったく役に立ちそうにありません。多くの人から見れば、どうでもいいゴミみたいな研究です。また実際、研究のため、古本、古雑誌、絵はがき、コピーなど、ただの紙くずにすぎないようなものを、けっこうな時間と金と労力をかけて、膨大に収集しています。そうした行為じたい、多

くの人の目には、理解不能な紙フェチとしか映らないことでしょう。

こうして大学で研究していなかったら、私なんか、悪知恵を働かせて犯罪に手を染めていた可能性もなくはない人間です。そんな私が研究者となることで、役に立たないなりに悪いことをせず、今日も生きているわけです。その点では、まちがいなく世の中の役に立っているとはいえるのですが……。

私には、梅棹先生のように堂々と「学問は道楽だ」と断言するほどの度胸はありません。学生の出す授業料で、あるいは国民の払う税金で、こんな紙くずを集めていていいものか、と思うこともあります。それでも成果をコンスタントに出せていればいいのですけれども、なかなかそうはいかない自分が、情けなくなるときもあります。

こうした振り切れない後ろめたさを覚えつつも、やっぱりだけど、自分がおもしろい、わくわくする、ときめくからこそ研究を続けているのだと、ボソッとつぶやくぐらいはしておきたい。京都文教大学人間学研究所は、そうしたつぶやきに少しは元気を与える場でありたいとも考えます。

本号の校正中に、梅棹忠夫先生の訃報を聞きました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。